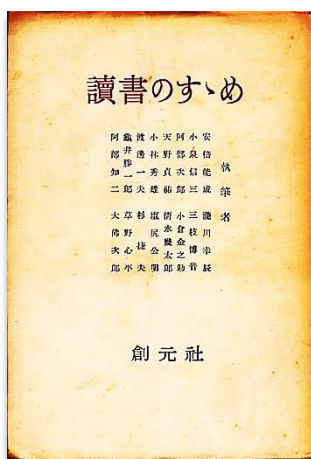


鹿沼の自然・栃木の旅

月報第29号

(2014年11・12月)



『読書のすゝめ』

詳細は4頁から

北光クラブ

自然観察クラブ 鹿沼

真岡鐵道沿線、小さな旅

～七井駅より芳賀富士を越えて安楽寺参詣、茂木駅よりSL乗車～

この頃では、スキーをやりに行くか、汽車で温泉へでも行くかするのが、冬の旅に最もふさわしいことのように考えられるが、スキーもなく、汽車も余り便利でなかった頃の旅好きな人は、雪の中を徒歩しながら永い道中をやった。露伴の「酔興記」を読んで見ると、明治22年の正月に草鞋ばきで、信越線の田中駅で下車してから飛騨の高山まで歩いている。そしてその間に和田峠だの鳥居峠だのを越えている。(中略)

冬、靴や草鞋で旅をする物好きを笑う人があるかも知れない。しかし、本当に自然を楽しむ人間からいうと、青葉や紅葉の山もいいが、晩秋や初冬にかけての落葉や新雪の旅もいい。

落ち葉の散り敷く山の膚や古木寒巖の山容を眺めつつ落葉を踏む旅、新雪に輝く山峰を仰ぎつつやる旅も趣味がある。特に落葉を草鞋ばきで踏みつつ歩く旅の味などは、最も日本的な味わいのするもので、恐らく日本人ならでは分らぬものであろう。そこには幽寂をよこぶ日本人の趣味を満足させるものがある。

落ち葉を踏む幽かな声にも何かしら、宇宙的なものを感じずる日本人の象徴的な気持がそれに感じられる。過去の日本文学が割合に紅葉や落葉に対して理解をもったのも、一つにはここに原因があるとも考えられる。(後略)

田部重治『ふるさとの山々』(昭和19年7月・六合書院発行)より「初冬の山村」

真岡鐵道に乗って茂木方面に進むと、益子から先では、いつも右側に富士山の形の山が見えます。今回は益子駅に車を置いてディーゼル車に乗り、次の七井駅で降りて歩き、その富士山の形をした芳賀富士(272m)を越えて安楽寺に参詣し、茂木駅でSLに乗って、益子駅に戻りましょう。安楽寺(浄土宗)の創建は737(天平9)年と伝えられ、1406(応永13)年、良勝上人によって再興されたといわれています。樹齢600年以上というケヤキは県指定の天然記念物。境内にある丈六阿弥陀堂は1679(延宝7)年の建立。堂内にある木造丈六阿弥陀如来坐像(県文化)は、像高約2.7mで県内最大級の仏像です。



日 時：12月21日（日）AM6:30 北小西門集合（解散はPM4:00頃）

行 程：鹿沼 AM6：40—740 益子駅 8：11—8：16 七井駅（40分）……

安善寺（10分）……熊野神社（10分）……芳賀富士（85分）……安楽寺
（80分）……茂木駅 14：26—15：01 益子駅—鹿沼

服 装：長袖シャツ、長ズボン、防寒着、帽子、軍手、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、

ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、ヘッドランプ、ストック、

参考書（栃木の山 150、栃木百名山ガイドブック、栃木県の歴史散歩）、
1/25,000 地形図は「真岡」「中飯」「茂木」

参加費：ガソリン代等 おとな 600 円、子ども 300 円、

乗車券（益子→七井）おとな 190 円、子ども 100 円、

//（茂木→益子）おとな 550 円、子ども 280 円+SL 乗車整理券 500 円

今年度初参加の方は保険料 800 円（3 月まで）

問合せ：電話 090-1884-3774（阿部）

次回予告など

板荷・大原天満宮御開帳

2015 年 1 月 11 日（日）午前 8 時より

参詣に同行ご希望の方は、阿部までご連絡の上、

当日 7 時 20 分にクリーニングハウスあべに集合してください。

（現地に駐車場はありません）

本殿の彫刻は上材木町および戸張町の屋台の彫刻と同じ彫師、
石塚知興によるものです。



茶臼山・毘沙門山ハイキングと
今市宿、二宮尊徳に因む史跡めぐり

2015 年 1 月 18 日（日）（詳細は追ってお知らせします）

亀井勝一郎他著『読書のすゝめ』

(昭和25年8月30日・創元社発行)

私の読書遍歴

草野心平

文学者などの読書の記録をよむと、大概の人たちは中学生時代に詩や小説などをよんでいる。けれども私にはそういう経験がほとんどなかった。

私にとって一番楽しかったのは中等教科書の地図だった。安っぽい刷りのセピアの山脈やコバルトの河川、赤い…、私の夢はそれらに乗っていつも途方もなく広がるのだが、貧乏だったので方々旅するわけにはいかなかった。そこで郷里の阿武隈などを、天幕なしの野宿や、鉄鍋を背負ってくさりのさがってる岩山を登ったりした。

中学の同窓で私が将来いふんでも文学に関係するだろうなどと思った友達は恐らくは一人もいまい。私は選手まではいかなかったが色んなスポーツをやった。慶応の普通部に移ってからは一時ポートもやったりした。

満でいえば十六才、家庭から独り離れて広東の大学に学んだ。その頃から漸く私にも遅蒔きながら読書の興味が沸きはじめてた。亡兄民平の遺したノートに刺戟されていつの間にか詩のようなものも書きはじめていたが、日本の詩界にはくらく、私は重にアメリカの詩集をよんだ。当時としては最も新しいイマジスト派の詩人たちやサンバーク、リンゼイ、マスターズ、カミングスなどの詩を読んだ。特にサンバークの Chicago Poems や Smoke and Steel その他を愛読し、それらのなかから選んで翻訳もした。小説では魯迅の阿Q正伝が出て、徐志摩、周作人その他の自由詩が稍々一般的になってきた時代で、私は新人であった徐玉諾の詩集「将来的花園」が好きだった。中学教科書でならった唐詩などの解釈の仕方が、中国の同窓のよみ方をきいて、意味だけによっていたことを初めて納得した。漢詩のもつ独得の骨格と音律とが意味同様に重要な問題であることが漸く解った。

私は海南島の植物標本に学名を書き入れることなどで苦学していたが、その金の一部でジャンクリストフとドストエフスキイの英訳全集本を丸善からとりよせたりした。ツワイグのロラン伝なども引きつづいて注文した。香港へ出かけていってタボールに会った

(次ページへ続く)

のもこの頃だった。

一方河上肇の「社会問題研究」や「種蒔く人」や「我等」などを日本に注文し、傍ら英語を通じてラディカルな本を読み漁った。

そのように私の読書は焦点がなく、ただ雑然と、でも漠然とはしていたが一つの方向に傾いていった。後年東京で屋台の焼鳥屋をしていた頃サッコヴァレゼッチの手紙(単行本)やファレルの「近代学校の起原と理想」などを訳したのも、そうした傾斜でのささやかな動きの一つだった。

三十代を過ぎてから中学時代の「地図」が復活したのか、探険記や山の本などに興味をもった。山歩きが出来なかった腹いせみたいの本をとおして色んな土地をほつつき歩いた。タクラ・マカンを詩に書いたことがあったが、その後ヘディンをよんで、私の想像よりもはるかに凄漠としているので恥をかいたが、地図から生れた私のイメエチがそれ程けたはずれの突飛さでないで今でもそのままにしている。



ヘディンの著書の一つ
『彷徨える湖』

絵画その他の芸術に関するものは学生時代からぼつぼつ読んでいたが、いまに到るまで系統だって勉強したものはない。それから自然科学や物理の本、そうした傾向のものに傾倒し、それは現在にまでつづいている。それに就いても残念に思うことは、学生時代にそれらの基礎的な学問をしておかなかったことである。例えば物理学といっても私にとっては妙ちきりんなもので、読み方は見当外れの文学的なものにちがいないのだが、分らないながらもなんか栄養になるような気がして読んでいううちに、ここ数年来面白いもの一つになってしまっている。

文学書、特に小説は「犬も歩けば棒に当る」式にぶつつかれば読む程度にしか読まなかった。大体四十を過ぎてから読みだしたといった方がよく、「吾輩は猫である」などを読んだのも終戦後のことである。「藤村詩集」をはじめて読んだのも終戦後である。白秋や啄木などの時代の詩や歌を、よく宴会などできくことがあったが、それらを暗誦するなどというそういう時期が私にはなかった。それから明治に遡ると猶更知ることががすくなく、むしろ不思議に槐多の詩などをいまでもいくらそらんじている。

そのように私自身文学者のはしくれであるくせに、文学書の読書はまるで遅蒔きで話にならない。日本近代詩の系譜も、詩話会以前になるともうろうとなってくる。

私が広東時代によんだ日本の詩人は槐多や賢治であり、少したってから日夏や千家をよんだ。光太郎や暮鳥や朔太郎をよんだのは日本に居居ってからのことである。そして本当のところ私は未だに「藤村詩集」を通読していないし、有明や泣菫なども読んだのは僅かである。例えば藤村の詩のあの有名な序文の方に、あの有名な「小諸なる……」などより遥かに多く詩を感ずる、そんな見方のせいによるのか、明治の詩は私にはドライである。曾て人々を魅了したあの音律が、語呂合せのようなものとして、その感傷は耳ざわりで参ってしまう。しかし今後は試験勉強のつもりで近代の系譜を、自分なりの見方で考えてみたいと思っている。

私は文学書を読んで栄養をとろうとは思わなかった。詩や小説から詩の栄養はとれないと思っていた。これは或いは間違っているかもしれない。が現実として私は、詩を書き出した二十才以後から、栄養分は文学書以外のものから摂ることにいつのまにか自分自身のなかで習慣づけてしまっていた。

例えば年に一日位ランポウをとりだして読んだりするが、それは栄養というよりは刺戟への願望であったようだ。

近来、然し色々な文学書をかじり出したことから、文学を知らずに文学を書くこととの不可能を、恥じながら漸くさった。何も私は学問的に勉強しようとは思わないが、文学のなかからもビタミンのAやCやを、しづかに摂取したいと思っている。全くの晩読である。

そして傍ら、いままでぼんやりながらも読みつけてきた文学書以外の書類は、これはどうやら止みそうもないので自然続けてゆくことになるだろうと思う。

中学高等学校の諸君におすすめしたい本

草野心平

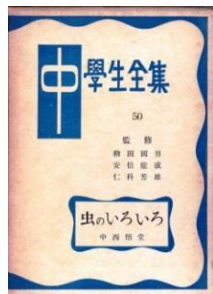
「雪に生きる」(猪谷六合雄著、羽田書店)

ナンセン伝(岩波新書)

寺田寅彦随筆篇(岩波文庫)^{※1}

宮澤賢治全集中の童話篇(十字屋書店)

ふくろう文庫(小山書店)



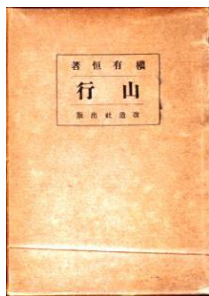
中学生全集
の1冊

中学生全集(筑摩書房)※2

現代詩講座(創元社)

「山行」(槇有恒著、岡書院)※3

アンデルセン童話集(岩波文庫)



槇 有恒『山行』

注※1 寺田寅彦は、『読書のすゝめ』の執筆者の一人でもある。本号「愛書家のひとりごと」で紹介しているアンソロジーの一つ、岩波文庫『山の旅 大正・昭和篇』の中にも寺田寅彦の「雨の上高地」が収められている。

※2 中学生全集の一つに、中西悟堂著『虫のいろいろ』がある。

※3 槇 有恒著『山行』は言うまでもなく山岳書の名著の一つ。



草野心平の詩作品の一例

樹木ノ論理

冬ノ裸ノ樹木タチノ。
裸ハ真実美シイ。
小サイ庭ノ大キナ樹。
槐ヤ樺ヤメタセコイヤ。
陣陣ノ寒氣ノナカデ。
風吹ケバ風ノ氣儘ナリニ枝枝ハ揺レ。
雪降レバ雪ノ思フママニ雪ヲ積モラセ。
夫夫ノ樹木ハ夫夫ノ個性ニ従ヒ。
夫夫ガ夫夫独リ燃エル。
強イマツタウナ樹木ノ倫理ダ。
例ヘバ自分ノ。ソシテ。
人間ノ倫理ナド当テニチラナイ。
人間ノ倫理ノ在リ方ナラ動物タチニ聞クガイイ。
動物タチハ答ヘルダラウ。
人間ハオレタチトオンナジデンノウヘ殺シ屋ノ臭ヒモスル臭イ臭イ動物ダト。
槐ヨ。
樺ヨ。
メタセコイヤヨ。
改メテ今。
オレハ君タチヲ仰ギ見ル。




『乾坤』より)

筆者紹介・草野心平

くさの しんぺい、詩人。1903（明治36）年5月12日—1988（昭和63）年11月12日。福島県石城郡上小川村（現在のいわき市小川町）に父馨、母トメヨの二男として生まれ、祖父母のもとで育つ。幼い頃から腕白でひどく癩が強い子どもで、本を食いちぎり、鉛筆をかじり、誰かれとなく噛みついてたという幼少期を、故郷の阿武隈山系に見られる大花崗岩のように「ガギガギザラザラ」だったと自身で描写している。兄の民平（1899—1916）、弟の天平（1910—1952）も詩人。

1919（大正8）年、県立磐城中学校を中退、上京し、翌年、慶応義塾普通部に編入。1921年、中国広東省広州の嶺南大学（現・中山大学）に留学。16歳で夭折した長兄民平の遺品である3冊のノートを持参、そこに書かれていた詩や短歌に触発され、詩を書き始める。同級生から「機関銃（マシンガン）」と呼ばれたという盛んな詩作ぶり。この留学時代に、青春を謳歌するとともに詩人としての第一歩を踏み出す。

1923（大正12）年夏、帰省すると、亡兄との共著詩集『廃園の喇叭』を、母校の小川小学校から謄写版を借りて印刷。1925年には、同人誌「銅鑼」を創刊。宮沢賢治、黄瀛（こうえい）らが同人。同年、排日運動のため卒業を待たずに帰国してから、貧困の中、新聞記者、屋台の焼鳥屋、出版社の校正係等で生活の糧を得ながら転居を30回以上繰り返す。結婚後間もない1928（昭和3）年に移り住んだ前橋では、明日の食べ物のおてもないという貧窮ぶり。が同年、初の活版印刷による詩集『第百階級』が世に出る。

「蛙」をはじめ「富士山」「天」「石」等を主題にした詩作の根底には「すべてのものと共に生きる」という独特の共生感。さらに書、画等、多彩な創作活動を展開する。自身の歩みを「ジグザグロード」と表現したように、創作活動の一方で、戦後、故郷の小川郷駅前に開いた貸本屋「天山」、居酒屋「火の車」とその後のバア「学校」等、様々な職業に就く。1935（昭和10）年、創刊に参加した同人詩誌「歷程」は587号（2013年12月現在）を超えて現在も続く。高村光太郎、中原中也らをはじめ、広範な交友関係が垣間見られる。それらが渾然一体となって心平の魅力に。

1960年、川内村名誉村民、1975年、日本芸術院会員に推輓、1983年、文化功労者、1984年、いわき市名誉市民、1987年、文化勲章受章。

1988（昭和 63）年 11 月 12 日、1,400 篇余の詩を残し、生涯を終える。

草野心平・おもな詩集

『第百階級』（1928・銅鑼社） 『母岩』（1935・歷程社） 『蛙』（1938・三和書房）
『絶景』（1940・八雲書林） 『富士山』（1943・昭森社） 『大白道』（1944・甲鳥
書林） 『日本沙漠』（1948・青磁社） 『牡丹園』（1948・鎌倉書房） 『定本 蛙』
（1948・大地書房） 『天』（1951・新潮社） 『亜細亜幻想』（1953・創元社） 『第
四の蛙』（1964・政治公論社無限編集部） 『詩画集富士山（棟方志功版画）』（1966・
岩崎美術社） 『こわれたオルガン』（1968・昭森社） 『太陽は東からあがる』（1970・
弥生書房） 『蛙の全体』（1974・落合書店） 『富士の全体』（1977・五月書房） 『絲
綢之路 シルクロード詩篇』（1985・思潮社）
『凹凸』（1974）『全天』（1975）『植物も動物』（1976）『原音』（1977）『乾坤』（1979）
『雲気』（1980）『玄玄』（1981）『幻象』（1982）『未来』（1983）『玄天』（1984）『幻
景』（1985）『自問他問』（1986）（以上筑摩書房）



『読書のすゝめ』について

同名の本は数多あるが、戦後間もなく世に出た本書は、「第一部 読書論」「第二部 私の読書遍歴」の 2 部構成。執筆者は戦前から戦後にかけて活躍した錚々たる顔ぶれである。内容には大正時代に遡る既出文、放送原稿の再録等も含む。

第一部は阿部能成（1883—1966、哲学者・教育者・政治家、文部大臣・学習院院長）、小泉信三（1888—1966、経済学者、慶應義塾塾長）、三木 清（1897—1945、哲学者）、阿部次郎（1883—1959、哲学者・美学者・作家）、西田幾多郎（1870—1945、日本を代表する哲学者、京都大学名誉教授）、寺田寅彦（1878—1935、物理学者・随筆家・俳人）、天野貞祐（1884—1980、哲学者・教育者・文学博士、文部大臣・独協大学学長）、小林秀雄（1902—1983、文芸評論家・編集者・作家）、渡邊一夫（1901—1975、フランス文学者）、亀井勝一郎（1907—1966、文芸評論家）。

第二部は滝川幸辰（1891—1962、法学者、京都大学総長）、三枝博音（1892—1963、哲学者）、小倉金之助（1885—1962、数学者・数学史家・随筆家）、塩尻公明（1901—1969、哲学者）、杉 捷夫（1904—1990、フランス文学者、東京大学名誉教授）、

草野心平、清水幾太郎（1907—1988、社会学者・評論家）、阿部知二（1903—1973、小説家・英文学者・翻訳家）、大佛次郎（1897—1973、作家）。

巻末に、滝川・塩尻・草野・杉の4氏による青少年向けの推薦図書の項が付いていて興味深い。

参考図書：高内壮介[※]著『草野心平論』昭和56年11月20日・柘の葉書房
三木 清著『読書と人生』2013年9月10日・講談社文芸文庫
小林秀雄著『読書について』2013年9月25日・中央公論新社

※ 高内壮介メモ（鹿沼ゆかりの人物ですので簡単にご紹介します）

たかうち そうすけ（すみお・澄夫）（1920年—1997年）鹿沼出身（？）の詩人。

日本現代詩人会会員。詩誌「歷程」「同時代」同人。草野心平の盟友。工作舎刊『湯川秀樹論』で1974年歷程賞受賞。鹿沼の文芸総合誌「鹿苑」同人、栃木県文芸協会会長、県文化功労賞受賞、栃木県立鹿沼東高等学校・鹿沼市立東小学校等の校歌作詞など。「佐野屋建設」代表取締役・栃木県建設業協会会長。

国立国会図書館サーチによれば『現代日本前衛詩人選』（建設詩人社編・刊・1948）への「身重の魚」所収を始めに、『暴力のロゴス—科学のディアローグ—』（母岩社・1973）、『湯川秀樹論』（工作舎・1974）（歷程賞受賞）、『現代詩人論』（落合書店・1975）、『秩序と混沌—湯川秀樹論—』（工作舎・1979）、小説『天の鈴』（工作舎・1980）、『遊びの時代』『詩篇 下野古事記』（共に八坂書房・1981）、『草野心平論』（柘の葉書房・1981）、『栃木県文士往来』（編者代表）（栃木県出版販売・1981）、『ふるさとの神話』（高内壮介・文、杉山吉伸・絵）（栃木出版・1982）、小説『母子地藏変容』（柘の葉書房・1983）、詩集『萤火』（八坂書房・1985）、『古代幻想と自然—縄文から湯川秀樹まで—』（工作舎・1985）、『詩人の科学論—湯川秀樹の創造とゲージ場の地平—』（現代数学社・1987）、『湯川秀樹論』（第三文明社・1993）、詩集『花地獄』（思潮社・1997）、『詩人と文明との修羅場』（雁塔舎・1997）など。

ほかに詩集『美貌の河童』（1947年）『人体医学』『可動律』など。

「鹿沼市史・通史編・近現代」（鹿沼市史編さん委員会編）第5部第3章第5節「現代詩と高内壮介」の項にも地域の文化文芸への貢献の足跡が記されていますのでご参照ください。

横根山転じて日光・輪王寺と外山尾根ハイキング

10月26日(日) 天気・晴れのちくもり

鹿沼学舎との共催で紅葉たけなわの横根山ハイキングを企画しましたが、申込者が少なく、参加希望者と相談して目的地を北方に変更、日光に向かいました。こちらも見頃の紅葉目当ての車がいろは坂に向かって長い列を作っています。

我々はその列から外れて日光山内へ。まず日光市からの常連、佐々木君のお父さんが、学芸員としてお勤めの輪王寺宝物殿と、その真向いで大修理中の三仏堂を案内して下さいました。世界遺産・日光の社寺として脚光を浴びている中では比較的地味な存在の宝物殿ですが、収藏品には実は歴史的・文化的に貴重な文物も多いそうです。スペースが限られるため展示されているのは僅かな点数ではありますが、分かりやすい解説付きでじっくり鑑賞する贅沢をさせていただきました。巨大な覆いに包まれた三仏堂は、7階まで階段を上げられるようになっており、材木の1本1本まで丁寧に取り外して解体してある様子がガラス窓越しに見渡せました。これは大修理中のこの時期にしか見られないものです。修理の内輪話も伺いました。

この後車に乗って、2年前にも歩いた滝尾古道の先、堰堤工事用の道路を遮断機がある所まで遡り、駐車しました。氾濫が頻発する稲荷川には、大正時代以来分厚いコンクリートの堰堤が幾重にも設けられてきて、今日では登録有形文化財として訪れる人のため遊歩道と案内板も整備されています。その堰堤の一つが渡れるようになっていて、紅葉モザイクに包まれた山々を眺めながら渡り、対岸の登山道に取りつきました。始めは杉落葉、やがて広葉樹の落葉に埋もれた道を、そして笹原、と時に道なき道を進み、見晴台に着きました。笹原の広場を落葉松林が囲み、見晴らしはあまりよくありませんが、木立の間に筑波山かと思われる山影がうっすらと見えます。隊長が目指していたピークは、さらに深い笹原の彼方、空模様もそろそろ怪しく、これ以上の冒険は諦めることにしました。



道半ば(結局ここで引返した)
見晴台で昼食の後

ここで昼食にし、のんびり弁当を広げ、ソーセージやお汁粉などたっぷりいただき、ゆっくり休んで引き上げました。

✿ 参加者

佐々木伸二・千洋・真澄・茂・理恵、石崎隆史・裕子、阿部良司・みゆき
(計9名)

✿ 見た植物(50音順)

(草) シロヨメナ、フモトスミレ、
(落葉樹) アオダモ、アサノハカエデ、アズキナシ、
イタヤカエデ、ウリハダカエデ、エンコウカエデ、オオイタヤメイゲツ、オオカメノキ、
オオバアサガラ、カジカエデ (右写真)、カマツカ、クリ、コゴメウツギ、
コハウチワカエデ、サラサドウダン (実)、サワシバ、サワフタギ、サンショウ、
ツノハシバミ、トウゴクミツバツツジ、ハウチワカエデ、ヒナウチワカエデ、マユミ、
マンサク、ミズナラ、ミヤマガマズミ、ヤブデマリ、ヤマブドウ、ヤマボウシ、リョウブ、
(常緑樹) ヤマツツジ、(針葉樹)ウラジロモミ、カラマツ



✿ 霧降高原歩道(外山尾根～見晴台)の風景



近代化遺産を訪ねる遊歩道
として整備されている

雲竜溪谷方面を望む
(中央奥は赤薙山)

氾濫の頻発を物語る白い河原
そしてたけなわの紅葉





堰堤の一基が
通れるようになっている
渡った向こう側が登山口



砂防堰堤を渡って振り返る
紅葉の中の人工構築物



↑昼食を摂った見晴台の笹っ原
落葉松に囲まれ、展望はあまり利かない



途中にあった
板状節理が見事な岩壁

「霧降高原遊歩道」とあり
高原から
歩いて来られるらしいが…
見失いそうな笹藪の中の道



紅葉と板状節理

大岩にまたがる大木の根
我慢比べの風景？



晩秋の八溝山系小さな旅
～萬蔵山ハイキングと那須神社参詣～
11月9日（日） 天気・くもりのち雨

雨の予報も出て、秋の遠出日和とは言いかねる空模様の下を、はるばる県北の大田原まで出かけたのは、那須神社とそれに隣接する那須与一伝承館を、学芸員の方に案内していただけることになっていたからです。矢板で日光からの佐々木一家と合流。早朝の大田原の街なかは、たまたま「芭蕉の里くろばね秋まつり」の当日で、「道の駅・那須与一の郷」前の広場や那珂川河川敷はイベントの準備に華やいていました。

その前にひと山、自然観察クラブとしては登らぬわけには行きません。栃木 100 名山に挙げられている中から、八溝山系の萬蔵山（534m）という山をハイキング。1 時間半ほどで登れる地味なスギ・ヒノキの山で、山頂の展望もありませんが、砂防ダム の堰堤を通して、長い石段を登った中腹の古い観音堂には安産・子宝祈願の絵馬やしやもじがたくさん奉納されていたり、分かりにくい道を探しながら至った山頂にも苔むした古い石祠があったり、地元では古くから親しまれていた山のように。少し肌寒い山頂で昼食を広げていると、ポツポツと雨粒が当たり始めました。

お祭りには気の毒な雨の中、扇をモチーフに造られた道の駅と併設の那須与一伝承館に到着。那須与一の故事を再現した機械仕掛けの人形劇を見た後、学芸員の懇切丁寧な解説で、特別展の鎧兜・刀剣や古文書などの展示品を見て回りながらその後の那須氏の足跡に思いを馳せ、続いて外に出て裏手の那須神社へ。こちら方面へ出かけて来るたび、寄ろうと計画してなかなか実現できなかったところ。流鏝馬も行われるという参道の奥に、修復が繰り返されて色鮮やかな楼門と、古色蒼然たる本殿が並んでいます。楼門前ではお祭りの一環のジャズコンサートの準備が雨の中進められていました（その後どうなったことやら）。

道の駅で野菜をたくさん買って帰りました。



萬蔵山山頂にて
鬱蒼たる植林地の中

❁ 参加者

佐々木伸二・千洋・真澄・茂・理恵、石崎隆史・裕子、
阿部良司・みゆき（計9名）



登山口近くにあった
ウバユリの実
にんにくスライス
のような形の種が散った

❁ 見た植物(50音順)

(草) ウバユリ (実)、オクモミジハグマ (花)、シャガ、
ツリフネソウ (実)、ノブキ、
(落葉樹) アオハダ、アカシデ、アカメガシワ、アワブキ、
イタヤカエデ、ウリハダカエデ、オオバアサガラ、オオモミジ、オトコヨウソメ、ガマズミ、
カラスザンショウ、クロモジ、コクサギ (実)、コアジサイ、コシアブラ、コゴメウツギ、
コハウチワカエデ、コナラ、サンショウ、シラキ、タカノツメ、タマアジサイ、
ダンコウバイ、チドリノキ、ツクバネ、ツタウルシ、ヌルデ、パイカツツジ、
ヒナウチワカエデ、ノダフジ、ホオノキ、ミツデカエデ、ヤブムラサキ、ヤマウルシ、
ヤマコウバシ、ヤマブキ、リョウブ、
(常緑樹) アオキ、シキミ、シラカシ、テイカカズラ、ミヤマシキミ (実)、ヤブコウジ、
ヤブツバキ、(針葉樹) イヌガヤ、カヤ、スギ、ヒノキ、モミ (大木あり)

❁ 晩秋の那須与一の里写真集



萬蔵山登山口

見落としそうな山里の一角



登山口近くの川辺にあった
コクサギの実



大きな堰堤の脇の
階段を登る



「満蔵山」と書く案内札も



堰堤の階段の
上から



堰堤の銘板



観音堂のようす
 (上、奉納された絵馬やしよもじ
 下、堂宇を飾るなかなかの彫刻である)



観音堂
 ちょっと一服



ミヤマシキミの実



那須与一のお話にちなんで、扇の形をモチーフに造られた
 「伝承館」と道の駅（前庭の池も扇形でした）

那須神社山門脇の手水場↓
 前川学芸員（手前）による
 文化財の説明に聞き入る



色鮮やかな那須神社楼門

🌀 こんな虫いました 🌀

27号で不明だった虫の名前を、山口さんに教えていただきました（初めの2点）。

その後秋にかけてもいろいろな虫たちと遭遇。山口さん、ありがとうございます。



(再録)

モンクロギンシャチホコ
(8月31日、戸張町・店頭)

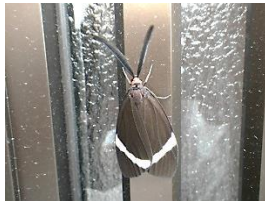


(再録)

アカエグリバ
(9月7日、店頭)



ワキグロサツマノミダマシ
(9月15日、上田町・住宅)
腹の緑が目立つクモ



ホタルガ

(9月19日、上田町・住宅)
赤い頭、白い輪が印象的



トガリスジグロエダシャク

(9月22日、上田町・住宅)



イラガの幼虫

(9月28日、戸張町・裏庭)
昆虫中「最痛」の毒針をもつ



ヒロヘリアオイラガ

(10月11日、店頭)
右上の幼虫の成虫



チャオビトビモンエダシャク

(10月14日、店頭)



クロスジフユエダシャク?

(10月14日、上田町・住宅)



ヤケヤスデ

(10月16日、店頭)



ネグロウスベニナミシャク

(11月15日、店頭)



ホタルトビケラ

(11月15日、店頭)
晩秋～初冬に出る虫

Unique な鹿沼の植物

サイカチ

サイカチは特に珍しい植物ではない。川沿いに、普通に生える植物である。ただ、この植物の幼樹を見かけることはめったになく、大抵は大きな木であり、巨木も多い。その特徴のユニークさゆえか、栗野町誌『栗野の自然』の中では「栗野の巨木」として、わざわざ「サイカチの分布」の項を起こしている。

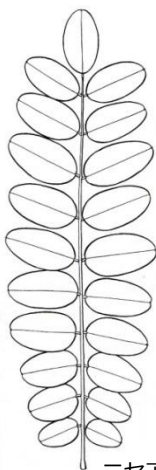
「普通に生える植物」と書いたが、僕はサイカチを見つけるのが苦手なのだ。どうしてって、河原には必ずと言っていいほど普通に生えている外来種のハリエンジュ（ニセアカシア）がサイカチに似ているからだ（ちなみに、アカシア蜂蜜、として売っているハチミツはニセアカシアのハチミツだと思う）。サイカチの羽状複葉の葉がハリエンジュのそれよりもずっと小さい、と気が付いたのは最近のことである。

さて、そのユニークな特徴とはなにか。まめ科に多い羽状複葉であることはハリエンジュと同じである。しかしサイカチの葉は枝分れするのである。つまり植物用語で言えば2回羽状複葉である。それならハリエンジュと間違えまい、と思われるが、それは幼樹の特徴であり、成長すると大抵は1回羽状複葉になってしまう。

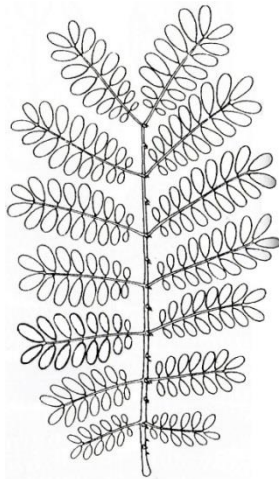
(次ページへ続く)



←サイカチ
(長さ 15~25cm)



ニセアカシア
(ハリエンジュ)
(長さ 20~30cm)



ジャケツイバラ
(長さ 20~40cm)



←サイカチの葉

サイカチの幹→
棘の出ている様子



←サイカチの実（さや）
大きくて硬くてくねくね

サイカチの棘→



もう1つの特徴、それは棘があることである。それもただの棘ではない。枝分れする棘なのである。いや、枝分れした棘なのである。成長にともなって枝分れしていくのではなく、小さい時から枝分れしていて、成長にともなって巨大化していく。それならやはりハリエンジュと間違えまい、と思われるが、その棘は樹齢を重ねるごとに落ちて行くので、巨木に付いている棘はすくない。しかし、たまたま棘が残っているのを見つくと、びっくりするほど大きいぞ。びっくりする、と言えばその実、つまりまめ科なので莢（莢果・きょうか）が大きいのも特徴である。それならやはり見つけるのはたやすいであろう、と思われるかもしれない。しかし、実を付けさえすれば冬までぶら下がっているから発見しやすいが、たとえ巨木であっても、その実をなかなか付けないのである。

僕はしばらく黒川沿いに生えるサイカチを知らなかった。武子には鹿沼環状線が武子川を渡る橋のすぐ上手に大きなサイカチがある。黒川沿いでも日光奈良部の黒川東堤、材木工場北側のヒノキ林の最奥、コンクリート用水路の川岸に、やはり大きなサイカチがある。しかし黒川の岸辺に生えるサイカチはないのか。

数年前、栃木県植物同好会の福田一男氏にそのことを話すと、「玉田から見笹霊園に行く道のゴルフ場を通る所、その下あたりに大きなのがあるよ」とのことだっ

(次ページへ続く)

た。つまりそれは東武線が黒川を渡る鉄橋の西側あたりだろうか。しばらくして福田氏から連絡があった。「あのサイカチは切られた」と。「それでも周りに小さいのがたくさんあるよ」とのことだった。

また、大芦川沿いのサイカチについて福田氏は白井平の橋の下手に1本、一の鳥居の1km位下手の道路ぎわに1本ある、と言っていたが確認できずにいた。

ところで僕は山に行った帰り、運転を始めて30分位経って必ず眠くなるので、コンビニや道路脇の広い所に車を止めて、休むことにしている。そんな時、山口龍治さんは必ず一人でぶらつくのである。僕がひと眠りして気が付くと山口氏はいない。しばらくして戻って来ると、氏は珍しい植物の発見を報告してくれる。僕のような凡人は目的地に行き、目的地の植物を観察して喜んでいるが、実はその途中にこそ、珍しい植物があるものなのである。山口氏はそれを知っているのであろう。三木清が「旅は過程である」と言っているように。

横根山に山口氏を伴ってハイキングに行った帰りだったと思う。横根の牧場から古峰原峠を越え、古峯神社を通過して一の鳥居を過ぎたあたりで眠くなってきた。しばらく休もうと思って右側の川岸の空地に車を止めると、山口氏はさっそくぶらつき始めた。気が付いてあたりを見渡すと誰もいない。たぶん道路沿いに歩いていったのだらうと思って車を動かした。まもなく1本の樹木を仰ぎ見る山口氏がいた。それはサイカチであった。周りが結構な日陰になるほど、大きなサイカチであった。その場所ははっきりわかっているが、次に山口氏を伴って古峰ヶ原方面に出掛けた時、そのサイカチはなくなっていた。

今年1月頃であったらうか。ナマズのえさの小魚を探しに、見野の鉄橋の下に出掛けた。ウェストウェーダーをはいて鉄橋の下の川を渡った。するとたどり着いた河原一面に大きな莢が散乱している。こんな大きな莢はサイカチしかない。上流のどこかに福田一男氏が言っていたのとは別のサイカチがあるはずだ。上流を探検してみなければ、と思った。

数週間後であったか、サイカチの木を探すべく、ウェストウェーダーをはいて双眼鏡を首にぶら下げて鉄橋下に降り立った。双眼鏡を覗くと、サイカチの木はすぐに見つかった。大きな莢をたくさんぶら下げていたからである。50mほど上流の右岸である。この鉄橋の200m程上流に堰堤があって、そこで分かれた用水はゴ

ルフ場の下を通過して、この東武鉄橋に流れてくる。ここで一旦本流に合流し、すぐにまた玉田町方面に用水路として流れて行く。本流はこの鉄橋の所に堰堤があるので深い。そこで用水路を上流に向って遡行し、右側の笹藪に這い上がって藪こぎで本流の岸辺を目指す。これが探検というものか。大きなオニグルミの木に絡みついた太いツルマサキがある。そしてやっとたどり着いた本流の岸辺に、直径30cm位のと20cm位の2本のサイカチがあった。

「旅は過程である故に漂泊である。出発点が旅であるのではない。到着点が旅であるでもない。旅は絶えず過程である。ただ目的地に着くことをのみ問題にして、途中を味わうことができない者は、旅の真の面白さを知らぬものといわれるのである。」

三木 清「人生論ノート～旅について～」

(阿部良司)

山書談話室

恒例、田部重治研究会・白坂正治氏からのおたよりです。

前略

『月報第28号』拝受いたしました。今号もまた盛りだくさんな内容で味読させて頂きました。

ウェストンについての講演を日本山岳会で浦口文治がした時の司会(進行役)は田部重治だったと確か記憶しております。人間模様の山なみですね。

「わが山旅五十年」の帯、共通の数字の「五」が目には焼きついて迫る(?)感じがします。視覚をくすぐる書影はいいですね。

「田部重治の登山と英文学」の御購入、改めまして厚く御礼申し上げます。一冊を通してそれぞれの執筆者の視点の違いを追って下さったら幸いです。

田部先生ゆかりの慕わしい信濃(信州)で大地震。阿部様の今回の特集のきっかけの木曾御嶽山と同じく大いなる出来事に伸びやかに反応する感性の切っ先を磨き続ける姿勢の大切さを思います。乱筆乱文にて。 草々 '14 11/23



『わが山旅五十年』の五、「創刊5周年」の5の共通性。気が付きませんでした。

ところで、再び木曾御嶽山の噴火について。

僕は今回の御嶽山噴火が起きるまで、中学生の頃の日本地図だけを見ていて、詳しい地形図などを見たことがなかったので、木曾御嶽山は富士山や浅間山などと同じように典型的なコニーデで、単独の独立峰だと思っていたのです。御嶽は本峰剣ヶ峰の西方向と南西方向に向かって長い尾根が延びており、中学校の地図帳など、多くの日本地図で、剣ヶ峰を中心としてほぼ円形に茶色で染めており、北に延びる稜線の存在に気が付かない、というのが原因なのだと思います。ところがテレビの映像で見た御嶽山は中央アルプス、八ヶ岳に次ぐような連峰ではないですか。詳しい地図を見てみると、確かに連峰の南端の剣ヶ峰(3067m)には一ノ池、二の池という2つの噴火口があるものの、およそきれいな形のコニーデだ。ただしそれだけではない。北に連なる摩利支天山



(2959m)の北東側には三ノ池の噴火口があり、さらに北上すると飛騨頂上と継子岳(2858m)の間には四ノ池の噴火口がある。つまり、御嶽山は南北に連なるコニーデの連峰だったのですね。日頃から草野心平に習って、もっと地図を読んで、想像を拡げる楽しみを持つべきだ、と思いました。(阿部良司)

愛書家のひとりごと

アンソロジー・選集

アンソロジーというのは、こんな作家がこんなことも書いていたのか、とか、聞いたこともないこんな人がすばらしいことを書いている、という発見があるからおもしろい。今、この稿を起こそうと思ったきっかけは、田部重治が『北アルプス』と『スキーの山旅』、深田久弥が『富士山』『峠』『高原』『上高地』といった、一定の地域や事柄をテーマにして何人かの登山家や作家が書いた短編を編集した本が頭にあったからである。念のため書架の端から端まで簡単に目を通してみると、そういう本がいくつかある。まあ我が家の場合は山の本がほとんどであるが、山以外にも一つのテーマにしぼって何人かの人々が執筆した本、あるいはそのような文章を集めた本はこの世にたくさんあるのだらう。どんな人がどんな文章を書いているのか、たとえ多くの作品の中の一つではあっても、知らなかった人、また読んでいなかった登山家や作家の短編を読むことに

(次ページへ続く)

よって、その作家の一端を知ることにより、その人に興味を持って、その作品群にのめり込んで行ける可能性もあるだろう。

すなわち、アンソロジーは読書へのいざないの書である。まずは編集人すなわち読書好きの著名な作家や学者が選んでくれた、選ばれた作家の短篇を読んで、どんな作家がいるのかを探す。楽しいことである。

ここで、手元にあるいくつかのアンソロジーを列記しておきます。

田部重治編「スキーの山旅」	昭和5年11月21日	大木書店
深田久弥編「高原—紀行と案内—」	昭和13年7月15日	青木書店
深田久弥編「峠」	昭和14年8月5日	青木書店
深田久弥編「富士山」	昭和15年12月20日	青木書店
田村 剛・本田正次編「武蔵野」	昭和16年5月25日	科学主義工業社
武田久吉編「尾瀬と日光」	昭和16年8月10日	山と溪谷社
松村英一監修「武蔵野随筆」	昭和17年11月20日	文林堂双魚房
川崎隆章編「尾瀬と捨枝岐」	昭和18年2月11日	那珂書店
田部重治・熊沢復六編「北アルプス」	昭和18年2月15日	六藝社
川崎隆章編「岳」	昭和18年8月15日	山と溪谷社
深田久弥・長尾宏也編「上高地」	昭和33年6月30日	修道社
串田孫一編「山のABC」	昭和34年12月25日	創文社
川崎隆章編「会津の山々・尾瀬」	昭和36年5月20日	修道社
串田孫一編「山のABC・2」	昭和37年12月25日	創文社
串田孫一編「山のABC・3」	昭和44年12月15日	創文社
第Ⅱ次 ^{ロップ クライミング クラブ} R・C・C「登攀者—積雪期登攀記録集—」	昭和38年7月1日	山と溪谷社
尾崎喜八・串田孫一・他著「自然手帖」	昭和39年3月10日	大和書房
深田久弥・他著「富士山」	昭和40年6月30日	雪華社
近藤信行編「山の旅 明治・大正篇」	2003年9月17日	岩波文庫
近藤信行編「山の旅 大正・昭和篇」	2003年11月14日	岩波文庫

☺ 本号の内容 ☺

山行案内	真岡鐵道沿線、小さな旅 ～七井駅より芳賀富士を越えて安楽寺参詣、茂木駅より SL 乗車～	2
次回予告など	板荷・大原天満宮御開帳 茶臼山・毘沙門山ハイキングと今市宿、二宮尊徳に因む史跡めぐり	3
表紙の本	亀井勝一郎他著『読書のすゝめ』 草野心平「私の読書遍歴」 「中学高等学校の諸君におすすしたい本」「樹木ノ論理」 筆者紹介・おもな詩集 『読書のすゝめ』について・付・高内壮介メモ	6 8 9
活動報告・1	横根山転じて日光・輪王寺と外山尾根ハイキング	11
活動報告・2	晩秋の八溝山系小さな旅～萬蔵山ハイキングと那須神社参詣～	14
こんな虫いました		17
Unique な鹿沼の植物	サイカチ	18
山書談話室		21
愛書家のひとりごと	アンソロジー・選集	22

鹿沼の自然・栃木の旅 月報第29号

2014年12月発行

北光・自然観察クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp



ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

